腐り切った組織の実態を継続してウォッチする　第八十弾

神社本庁再生への道―その四十三

日本混迷の原因は歴史の忘却と独立精神の欠如にあり
―神道界は自浄して邪気を祓い、新時代を切り拓け

藤原　登（フリーライター）

当然の報いであるが、岸田内閣の低迷が続いている。

三年前に菅内閣から政権を引き継いだ岸田内閣は、基本的に安倍政権以来の政策を引き継いできた。最大派閥の安倍派に遠慮しつつ、自民党内での地固めを優先させてきたということだろう。

そこに昨年末、いわゆる裏金事件が明るみとなった。岸田派を含む派閥の会計責任者が立件される事態をうけ、岸田総理は派閥の解散を打ち出した。しかし、裏金問題の主犯とも言える安倍派幹部は真相を語らないまま、中途半端な政治資金規正法の改正で幕引きを図ったため、目の上のたんこぶだった安倍派は崩壊したものの、岸田政権の求心力も一挙に衰え、秋の総裁選に赤信号が灯る結果となった。しかし、今のところ岸田氏以外に有力な候補はおらず、故に政治の昏迷状態から脱皮するには、解散総選挙を引き金に政界再編を実現させるしか方法はない。しかし、野党も相変わらずの烏合状態で、再編を主導できる人材は与野党ともに見当たらない。

地方政界も彼方此方で爆弾を抱えている。

初めからカジノを含む統合型リゾートであるＩＲへの地ならし以外は、開催意義が希薄であった大阪・関西万博は、会場準備の絶望的状態が明白となれば、いかに粉飾するかが最大の懸案となる。「いのち輝く未来社会のデザイン」どころの話ではない。オリンピックを超える負のレガシーになるだろう。

また、三選目の東京都知事選挙に勝利した小池百合子氏は、選挙がらみで複数の刑事告発を受けており、いつ検察が動き出してもおかしくない状況だ。そして、都が主導した外苑再開発事業は、反対運動が沈静化する気配はない。東京都に都市計画のまともなビジョンがあれば、認可される筈のなかった代物であり、このまま進むなら、これも負のレガシーに位置づけられるだろう。

断末魔の神社本庁・田中体制

混迷状態を示す指数があるなら、自民党や東京都、大阪府を抑え断トツ一位であることは間違いない神社本庁は、ついに現体制がいつ崩壊してもおかしくない状況に到った。

神社本庁を襲断、私物化してきた田中恒清総長、及び神道政治連盟の打田文博会長による双頭体制に、もはやかつての力はない。最高裁で係争中の総長選任をめぐる裁判では、一審、二審は田中氏が勝利した。それを追い風に両氏は、鷹司統理を支持する勢力に対し、様々な嫌がらせをしてきたが、その露骨な手口は、逆に温厚な神道人たちが神社本庁批判に起ち上がる切っ掛けになった。

それを決定づけたのは、前号で報じた五月の評議員会における田中一派の非常識な議会運営であるが、加えて総長裁判は、最高裁で覆る可能性が日増しに高まりつつある状況となっている。

さらに、一昨年末の元職員の横領事件に端を発する東京都神社庁の問題は、事実関係の再調査が進み、神社本庁の常務理事でもある小野貴嗣神社庁長の責任問題へと発展した。そしてこともあろうに、小野庁長個人の金銭をめぐる不正行為が露見する事態になっている。東京都神社庁の役員は、小野氏を庁長の座から引きずり下ろす方法について、日夜試案を重ねる段階に至ったようだが、これに対し、何故か神社本庁側が小野氏を守るために様々な介入行為を重ねているという。断末魔とは、このことである。

神社本庁は将来のビジョンを示せるか

そして今、注目すべきは、田中体制の崩壊よりも、統理のもとで次の神社本庁を牽引、領導してゆく新体制が、いかなるビジョンを示して、組織の再生を果たしてゆくのかという点に尽きる。そのビジョン、手法の検討は、是非とも我々のような外部の声を遮断することなく、透明性をもって進めていただきたいと願う。それは神社本庁の問題のみならず、現在の宗教団体、宗教法人の抱える問題にも、必ず好影響を及ぼしてゆくと考えるからだ。

歴史に照らしつつ現代社会の状況解析を試みると、人間社会は個人の力では如何ともし難い宿命、宿因を常に背負っているように思えてならない。そして人々は、時運の赴く流れの中に身を委ね、そして時に、負の歴史を繰り返してきた。

しかし、繰り返す歴史の中に一筋の光を見出し、そこに自らの人生を捧げようとする人たちも、常に存在した。維新の志士たちがそうであったし、歴史的評価はともかく、先の大戦において回天を志した特別攻撃隊の勇士たちも、間違いなくそうであった。

「天地正大の氣、粹然として神州に鍾（あつま）る。」

幽閉の身であった藤田東湖が詠んだ「正気の歌」は、志士たちに広く膾炙し、皇室を崇め、文武を尊び、日本が独立を貫いてゆくための行動理念となった。今の日本に必要なのは、まさにこの精神であり、これを現実の社会で実践躬行すべきは、神道人をおいて他にはない。

現代の言葉でいえば、神道の精神を以て社会の師表となり、その健全な発展に努めるということであろうが、それには神道界が立派に自浄を果たすことが必要条件であり、それが第一歩となる。

○

しかし、田中一派を追い出しただけでは不充分である。混迷する社会の中に、自浄への一筋の光をさらに輝かしいものにしてゆくために、神社本庁の組織、神道界の在り方を再生、再興してゆくという心構えが大切であり、その姿勢が問われているということだ。

鷹司統理は、神社本庁の透明性、公平性をもった組織運営を希求してこられたが、その上に、神社本庁の未来へのビジョンを構築しなければならない。これは、一長一短には出来ない。深い学びと実践が必要だ。時に失敗もするだろう。まずは人材の発掘と育成であるが、長年にわたる田中―打田体制により、表にでることの無かった隠れた人材が、大勢いる筈だ。

神道界が歴史に学び、独立自尊の精神を養い、その理念のもとに社会との関係を再構築してゆく。未来はそこから導かれると思う。

藤原　登（ふじわら　のぼる）
昭和二八年、東京に生まれる。広告代理店勤務の傍ら、歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。